

# 終日杳かに相同じ

はる

## 日居月諸

平年よりも大分早く梅雨が明けたとの知らせが西の方から聞こえてきて一週間になるが、東北では一向に曇り空が退く予感がなく、湿気に満ちた生ぬるい空気の占める日だけがが続いている。七月に入ってから数日ほど真夏が訪れた際に引つ張り出してきた扇風機が、今となつては起動しようものなら薄ら寒さと呼び込み、かといって外を歩き回ろうものなら肌着へと汗がじんわりとへばりつく。これならいっそカンカン照りの中で野垂れている方がずっといいと投げやりになるほどの愚図ついた日々だ。

夜になるとようやく涼しい空気が入り込んでくれるはずなのだが、雨は容赦してくれない。近くで停まっている車のエンジンのくすぶる音か、あるいは室外機の唸りがアパートの群れによって増幅されたのかと思えるほど、地の底からさざめき立って、耳を埋め尽くすようになった後、屋根を叩く音へと上り詰める。仕方なく窓を閉めきるとふたたび生ぬるさが訪れ、雨粒はコンクリートに半端な衝撃を残し、こもった音が室内を埋めるのを感じながら、実家に住んでいた頃は抜けるのよい音が響き渡っていたのにな、と木造建築をうらやましく思った。あれは防音をまるで考慮していない作りだからだったのか、ともかく

一度帰省した時に雨が降り出したことがあるが、聞こえてきたのは天井からだった、それも余所の屋根の反響だ。鳥の羽ばたきを察して遠くを見やるごとく耳を澄ましていると、やがて頭上へとやってくるのだが、屋内へともりはしない。こちらこそ天上なのだと言語するようには雨粒を空へと弾き返している、したたかな音だけが頭を越えて放たれていく。あれをきつと快哉を叫ぶ声とませこぜにしていたのだろう、鬱々とした空模様に向かって報復を食らわせているつもりでいたのだ、そうしていつしか雨ではなく自分が屋根を叩いているつもりでいた、それも耳でもって屋根を叩いていた、耳が屋根へと浮き上がっていつて心までそれに引つ張られ得意な心境へと上り詰めていく、まさに有頂天というものだ。

とはいえ、それも現在の閉塞からの開放を望む心が呼んだ幻聴で、実のところは至る所でキジが鳴いているような騒がしさだけがあるのだらうな、と寢床に入つて耳をたしなめるのだが、タオルケットをかける熱が下半身からこみあげてくるし、かといって布を退けると肌が粟立ってくる。寝心地をつかみそこねれば目をつむっているのに堪えかねるから、気を紛らわすためにあれこれと濫りな考えをめぐらし出し、興が乗って頭がはしゃいでくる。いまだ降り続く鈍い雨音に耳を埋められているのなら尚更のこと、耳も肌も眼も味気がない、それならばせめて妄想だけでも色気で彩っておきたいところだ。肌に熱のこもるのに耐えかねて突き放すが、かといって離れ続けているのも物さびしい、そのうち布を被るたびにどこか女の匂いに似た甘やかな

気配がふくらんで来そうだ、あるいは布を退けるたびに甘やかな匂いが遠のいていくように鼻を誘ってくる、とはいえ引き寄せられれば燻されるような熱気という罫にかかって、一人寝の味気なさを思い知らされる。

不眠が果てにまで至り、瞼の暗さにも慣れたからか少しの光さえまぶしく感じられて、車のライトの横切った跡か、それとも夜明けがやってきたのかと思つた頃に、無音が挟まった。いぶかしんだのも束の間、耳の奥にジリジリと焦げ付くような蟬の音が長く長く聞こえてきたので、とうに朝はやってきていたのだと知れた。とはいっても雨が止んだ後の雲間からは晴れが覗いているので、実感としては待ちくたびれた末に一息ついた時の心地こそふさわしかった。

それにしても、よくもまあ息が切れないものだ、と朝支度を済ませても尚鳴き続けている蟬にはげんなりさせられた。久しぶりの日差しに気後れしているせいかもしれないが、随分と気の長い声を聞いていると、もつと爆ぜるような声で鳴けるだろうに、どういう気紛れか加減をする余裕まで見せて終点を引き延ばしているようにも聞こえるから、有り余る力とはこういうものなのだ、と根負けした気分になる。しかも、これからしばらく、夏が終わるまで鳴き続けるのが決まっているのだから、それまでの計算はすでに済ませているのかもしれない。気が遠くなって、体の力が抜けていき、いよいよ耳に焦げ付くような声は拒めなくなった。

あれだけ閉塞からの開放を待ち望んでいたのに、いざ視界が広がっ

てくると尽きることのない展望に気圧されるのだから世話もない。仮にも二〇を越えたばかりなのに、老いぼれのような感慨を残すものと自嘲したが、考えてみれば蟬は寿命の大半を地中で過ごすのだから、こうして地上で鳴き続けるのは老境になる。つまり老いぼれに負けているのかと苦笑しそうになるが、案外、老人こそ力をあますところなく使いとおせるのではないか。

たとえば日和に外を練り歩いているかと思うと、ふとした拍子に立ち止まって、曲がった背中を伸ばす姿がある。皺ばんだ首をピンと張り詰めた先に、何かがあるわけではない。ただ空だけが広がっている。その割に長い間そこで佇んでいるから、傍で見守っている方も顎を上げてみるものの、何か見つけられるわけでもない、視線を落とすていくと、膝を曲げながら頭の重みを堪えている姿が変わらず立ちつくしている。どこにそんな力が残っているのかとも思うのだが、普段は気が散って仕方がないのに女の背中はずっと見つめられるのを踏まえると、あれは見つめている対象に力を分け与えられているのではないかと察せられる。蟬があれだけ鳴くのも、ひとえに雌を求めているからだと言ったことがある。そんな風に、自分が追い求めている者を逃さないためには、ひたすら同じ体勢を保ちつづけるための力配分が必要なのかもしれない。では、老人はいったい何を見ているのか。

もしくは、あの老爺は何か聞こえてくるのを待っていたのかも知れない。過去に聞いた音の残響が今も耳に残っているが、想像にもとづいて繰り返すしかないから、本物とは似ても似つかない。だからこ

そ何もない空を見上げる。本物の音が残していった力を頼りに、首の皺を張りつめさせながら、時折あふれそうになる力を膝で受け止めながら、何も聞こえてこない空を見上げている。似ても似つかない音がいつか本物へと変わるまで、あるいは本物とは言わないまでも得心の行くものへと変わってくれるまで。

大型の扇風機を何台か稼働させた体育館で、老爺はそんな風に天井を見上げながら、子供と教師を相手に話をしていた。といってもパイプ椅子に座っているから、おそらく支えるものは膝ではなく肩、そして首の皺だっただろう。

戦争体験を聞く催しが開かれたのは夏休みを控えた日のことで、同級生たちはただでさえ授業がなくなる上に、面白い話を聞けるという無責任な期待を胸に体育館に集まっていた。おまけに招かれた客人は馴染みのある顔で、東京で生まれた境遇を活かして普段から興味をそそられる話をしてくれたから、田舎の人間がはしゃぎ立つのも無理はない。厳粛にふるまっていたのは教師とこまっしやくれた生徒くらいのもので、体験を語る本人でさえ方言の通じなさに苦労した体験を話の枕にしつつ催しは軽妙に始まった。

しかし、いざ戦争を語る段になると、子供たちを見下ろしていた視線が段々と天井に向かっていった。話しぶりも軽やかなところは失せ、かといって重苦しくなるでもなく、どこか浮遊しているような、注意していなければ言葉の意味を取り逃してしまいかねない口調になっていく。体育館の窓から差し込んだ日差しが、白髪や眼鏡を銀色

に照らし出したことで表情もかすんだようになっていったから、話が余計つかみとれなくなった。

通常、重苦しい話を進める際、人は前のめりにならざるを得ないと知ったのは、それからしばらくしてテレビで原爆の体験を語る女性を見た時のことだ。聞いている小学生の方も膝を抱え、首をすくめて顔をほとんど動かさずに聞いている。話の重さに耐えかねていたのもあるだろうが、時に手を振りかざし、前のめりになっていく老婆の迫力に圧されていたのだろう。そうして視線が近づいた時、体験は初めて共有される。

そう気付くが早いのか、あの老爺の話をどこまでわかっていたのだろうか、記憶が怪しくなり始めた。子供たちはいわずもがな、教師さえも上を見上げていた。そこに何があるわけでもない。ただ、ひたすらに見つめていなければ、同じ視線に立ち続けなければ、この話を理解することは出来ない。だが、幼い首にそんな堪え症があるわけでもないで、首を下さざるを得ない。それでも何かをつかもうと、ひとまず首を膝に乗せ、椅子に座った男を見つめなおす。すると、幾重にも刻まれた首の皺の中に、一本だけ目立つものが見えた。喉仏にひっかかり、ピンと張り詰めているからそこだけ若さを取り戻しているようにも見えるのだが、今にもちぎれそうでもあった。気付けばその危うさに引き寄せられつつ集中を持ち直し、老爺の話を聞いていられた。

空襲警報は恐ろしいというよりも、キリのなさを味わわされて子供

ながらに気だるさを感じた、と老爺は言った。毎夜のように鳴り響いていたからでもあるが、遠くの方から聞こえてきたかと思えば、一気に耳にまで押し入ってきて、また小さくなり、また迫ってきて、といった具合に襲ってきて耳の中に波を作り上げてしまう。警報が鳴っていない間も耳は収縮を続け、遠くから聞こえた幻聴ともいえる音をきっかけに空想をたくましくすることもあれば、空腹を知らせる内臓の音が一気呵成に高まって動悸と区別がつかなくなっていくこともある。自分で自分を制御することが出来ず、何者かに乗っ取られているような気分が終戦を迎えてもしばらく続いたから、耳から全身の変調がもたらされるといふ事は大いにありうると思った。

東京への空襲は漸進的に進められ、老爺の住んでいた土地に加えられた爆撃はトドメとなった。余所の町が焼尽していくとの知らせは幼い耳にも呑みこめたが、実感としては町が崩れ去るよりも人間の諸々の感覚が平衡を失う方が早かったという。

そんなところへやってきた大規模な爆撃を地中でやり過ごしていたのだが、耳は地上から聞こえてきたはずの叫び声や轟音よりも、穴倉の中にいた妊婦の息遣いの方こそよく思い出せた。カビやら汗やらの臭いがこもり、誰もが息を切らしている中、一つだけ整った息遣いが聞こえてくる。身籠っている赤ん坊をなだめるためだろうが、本人の意図とは別に、穴倉の反響も相まって呼吸の見本を聞かされているような気分になった。その押し引きに従っていれば助かるような気がして、安らかな心地にさえなった。しかも、どうやら家族や近所の人々

も、いつしか奥の方から寄せては返してくる音に耳を傾けているようだった。今までそれぞれが自らの軒を構えながら好き勝手暮らしていたのに、今や誰もが身重の女に頼りきっている。夫が出征し、寄り合いの助けを借りなければ胎児どころか自分の身さえ持ち崩すような人に支えられている。

そんなおかしささえ覚える光景を見た後では、瓦礫が積まれた翌朝の地上を見ても、得心しか残らなかった。それぞれの家が仕来たりやら伝統やらを築き上げたところで、危機に見舞われてしまったら汗水を垂らして足どりのおぼつかない女を頼るしかない。爆撃やら火災やらがなかったところで、目の前に広がっている瓦礫が示すような脆さの方がふさわしい姿なのではないか。別に恨みがあったというわけではない。単純に、これまで見えなかったはずのビルまで見渡せるような開け放たれた視界のように、すっきりとした納得があるだけだった。それくらい慎みのない子供だったということですが、と言って老爺はゆっくりと首を下し、ようやく視線を合わせてくれたが、幼い瞳はそれについていけず、多くの口が開け放たれたままになっていた。子供はおろか、大人にも扱いかねる話だ。窮地に陥ったからこそその心境だといえぼそうした言葉が出てくるのも止むをえない。しかし、だからといってうなずいてしまったら、耳を傾けている者の命はどうなる。崩れ去った町こそ得心が行くのだとしたら、今現在自らの生活を積み上げようとしている営みは、無駄となってしまう。

とはいえ、語り口によって呼び起された焼け野原の光景は、妙にく

つきりと残った。後々大空襲の惨状を示す写真に接する機会があったが、おおよそ土地の者の説明する通り、そして思い浮かべた通りだった。瓦礫が丘を作るようにまばらに積まれているが、上空から見た限りでは平らにしか見えず、ダンプカーが辺り一帯を均してしまっただけのように禿げあがってしまった。方角を選びさえすれば川にまで届きそうな眺めが続く中、電柱やビルの鉄骨といった頑強だったはずのものが、その機能を失いながら空しく立ちすくんでいる。果てのない視界の先によく見えたものが、結局頼りない物だったとわかったら、絶望しか浮かんでこないのではないかと思われるが、元から頼りない物だったとの認識を前もって踏まえているのならば、得心しか残らないのだろうか。

こう言ってしまったては言い訳じみてくるけれど、と言って老爺は続けた。慎みがなかったのはそもそも常識というものが存在していなかったからかもしれないし、あるいは、それを教えてくれる人が周りにいなかったからかもしれない。教育は先生の方から一方的に教えるのではなく、子供が大人の顔を伺わなくては成り立たないでしょう、と言って、皺ばんだ瞼を横に寄せた。

大人が笑っているからこれはやっつていいことだ、怒っているからやっつていけないことだ、それが戦時中は成り立たない。表情というものはあった。ただ、いずれの感情も止め処なく溢れだしていくから、悲しんでいようと憤っていようと、はしゃいでいるように見える。経験から察するしかないが、おそらく自制心が弱くなってしまって、感情

に身をゆだねきっていたのだろう。そんな抑えの利かない顔つきを見ていると、いつ崩れてしまってもおかしくないと見えてしまうから、規範とするどころの話ではない。もはや人の顔が見られなくなってしまう。我が身を持ち崩していたというのに、他人を頼ることさえ出来なかった。

今となっては東京から山形に移るなんて都落ちにも程がある、などと近所の連中に言われるが、疎開にかこつけて母親の実家を頼った時、空襲とは無縁の日々を送っていた祖父母の顔が穏やかだったのには助けられた。皺深い顔が穏やかに微笑むのを見たら、こちらも頬がほころぶのを感じて、人心地というのはいかにも初めてわかった気がする。金銭の負担を少しでも減らすためにと学校が用意してくれた寄宿舎に預けられたが、そこで世話をしてくれる人々を見ても同じ感想が漏れた。方言が聞き取れないのには苦しみられたが、耳が一通りやられてしまった身としては、正常な神経を取り戻すために上り終えるべき階段のように思えた。一つ一つ土地の言葉に慣れていけば、型に嵌っていくように真つ当な人間に戻っていけるとの希望があった。

もともと、米軍の侵攻が東北にも迫ってきて、山腹に戦闘機が墜落したとの知らせが聞こえてきた時、穏やかだったはずの人々の顔がにわかには色めき立ったために、希望はあえなく潰れてしまった。上空からの視察が始まり警報が鳴る日が数えきれなくなった頃、海沿いの町が空襲に遭った。終戦を迎えたのは、それから間もなくのことだ。

首を下し、老爺は眼鏡を取って目元を手でほぐし始めた。その間、普段はわずかな静けさも耐えられない子供たちが、黙って彼の様子を見つめていた。むしろ教師の方がこれで話が終わりなのかと隣同士を伺いながらどよめいている。とはいえ、その声は大型の扇風機と蟬の鳴き声に消されているので、表情でしか戸惑いは読み取れない。ほとんど人の声が絶えてしまった中、老爺は眼鏡を掛け直すと、目の前を見据え直して口を開いた。

戦争にまつわる色んな言葉に君達はこれから接していくでしょうが、私にとって大切なのはそうした人間の脆さの方でした、君達はたくさんの夢を持っているでしょう、それを支えに生きていくことが出来る、私にはそれがなかった、戦争が終わったら少しはマシになったけれど、体の根っこに染みついたものは拭えないわけです、脆さの方が見本になってしまったんですね、君達がそんな目に遭うだなんて望みもしないことです、世の中になにかあるかわからないから、年寄りの戯言と受け取りつつ心に留めておいてください、目の前の見たくないものから目を背けても、人間はどうしても耳が御留守になってしまふ、目は自分の力でつむれるけれど、耳は手でふさいでも意味がないですから、雑音はどうしても入ってきてしまう、その時のために自分の殻に籠る力をつけておいてください、自分の殻に籠るなどはよく言われますが、それは周りが平穏であるからこそで、周りが雑音に満ちている時に自分を保つには結局殻に籠るしかないんです、君達はまだ殻に籠ったことがないでしょう、何を指しているのかさえわからない

かもしれない、それでいいかもしれない、わかる頃になったら殻に閉じこもるだけの力はあるだろうから。

一息に語った後、また沈黙を挟んだ。頭が持ち上がり、首の皺がふたたび現れる。まだ語ることがあるのかと聴衆は固唾を呑んだが、どうやら時計を見ていたらしく、教師に向かって段取り通り進んだのを確かめた後、これでおしまいです、と言って老爺は椅子から立ち上がった。

雨の降らない日を数えた方が早かった七月が終わって、ようやく梅雨が明けると、籠りきっていたものが発散の時を迎えたように猛暑が訪れた。降り続いた雨が湿気を残して行ったことで、屋外に出れば蒸しあがるような空気に苛まれる。急激な季節の変化に体は追いついていけず、熱に見舞われても体の芯は冷えたままのように感じられ、風邪と思しき寒気がやってくるのがしばしばあった。喉や鼻はぐずつき、腕や膝はだるさを抱えている。それなのに、寝込むほど大掛かりなものには悪化していかない。慣れない暑さにやられているだけかもしれないし、どうせお盆が近いのだからそれまでの辛抱、しかし、そんな無防備な自制心が顔を出してきた時こそ、いよいよ病が頭にまで上り詰めている証拠だろうか。

そんなふらついていく将来の姿をつぶさに見つめられるのは何もしていないからこそで、ベルトコンベアの機動音が鳴り続ける中で作業を続ける間は物思いにふけりこむ暇などない。ふけりこんでしまっ

ては体がおろそかになって身を持ち崩してしまいそうな暑さと騒音が今日も工場を包んでいる。梅雨の間はどこか抜けが悪いように聞こえていた作業音も、快晴が続けば湿り気もなくなったのか室内を反響し続けていた。手元の作業に没頭し続けるには自らの体への気遣いを怠ってはならないから、意識も確かに保たれる。機械の音によって周りを見渡す必要もなくなる。しかし、自分の体へとふけりこむのは許されるのに、心へとふけりこめないのは、膜に阻まれているようなもどかしさを感じるものだ。

時折、工員の投げやりな怒号が響き、言葉は聞き取れないが声色だけは読み取れる。仕事がかどらない時によく出る、せめて気持ちだけでも発散を味わっておこうとする喚き声だ。しかし、ベルトコンベアを相手にするだけなら仕事が滞るはずはない。本当に相手にしているのは、結局自分ということになるか。

「そういえば、お前帰省しないんだってな、働いてくれるのはありがたいけど、先祖に申し訳が立たんぞ」

近くの工員から声立ち、それに応える声がある。

「彼岸の内に済ませておきましたから」

「彼岸とお盆じゃ違うだろうよ、家族に顔を出す必要だってあるだろうに」

「一年おろそかにしたところで変わることでもありませんし。工場長だってほとんど休みは返上じゃないですか。それを助けるのも悪くありません」

そんな会話が聞こえたところで、何かの意図を伴ったものでもないから流していくほかない。特に片方はいつも大人しく、必要な言葉以外は口にしない後輩だから、その耳の聞き流すところにこだわっても仕方がない。後輩に絡んでいく方は作業の単調さに嫌気がさしたのかやたらと言葉をつないでいくが、いつものことだと他の工員はそちらを気にせずに手元を見つめ続けている。ところが、やりすごしていたはずの声が、何かの拍子に重くなっていた。

「大体お盆だからといって帰るといいうのがおかしいではないですか。先祖の供養もいつやったっていいはずだ。他人の決めた日取りに合わせなければ罰があたるだなんて、それこそ先祖は笑うでしょうね」

「ははっ、まあその通りかもしれない。しかし、そっちの方が世間も楽なんだ」

「生きている方の都合ですか、お笑い種だなあ」

相手の声がとげとげしくなっていくのに気付いて、休むことのなかった口がようやく結ばれた。まあいいや、とお茶を濁そうとしたが、機械音の中にまぎれてしまったのか、後輩のまくしたては止まらない。

「一周忌だの十周年だの、数字がなんだというんですか。それで生きている者の時間は落ち着きを取り戻すかもしれないけれど、それが死者のためになるといいますか。まあ結局のところは生きている方が取り仕切ることだから、それでもいいのかもしれない。ただ死者を名目にして現在の生活をまかなおうとする姿は度し難いな」

段々、他の工員の目も声の立つ方へ向かい始めた。言葉をつぶさに

聞いていれば、他の者が口にするのと変わりない、もどかしさから解き放たれようとする愚痴にすぎないとわかる。しかし、一方で誰かに問いかけている口調に聞こえるのも確かだ。誰かをまくしたてている。焚きつけてしまった者を相手にしているのではないから、それに対する応答はない。ひたすら問いかけが投げられている。誰もが振り返らざるを得ないが、身に覚えがないから、答えられるはずもない。

「それならお盆の間も働き続ける方が立派だな。結局のところ僕達は自分達の生活に汲々としているほかないんですよ。もしかしたらアイツもこのことに気付いているのかもしれない。だからこそ働き続けるし、僕が働く事を許してくれたんだ」

問いかけ続けるのが難しくなったのか、自分で答えを用意するようになった。もともと、収まる様子はない。答えにたどりついたら、次の問いかけが待ち受けている。どうやら落ち着きどころを失っているらしい。一度追求し始めたら、煮詰まるまでやめられない夕チなのだろうか。それならそれでいい。ただ、それは腹の中に収めている限りの話だ。そうしてあちこちに問いかけを撒き散らしていたら、どこから答えが出て、それを駁する声があり、と言った具合に際限が無くなりかねない。

工員の手が止まっているのを見かねたのか、いよいよ工場長が後輩の下へ向かい肩に手をかけた。振り返った目はぎよろりと剥かれていたが、

「上司をアイツ呼ばわりとは、偉くなったもんだ」

と言って微笑みかけられると、途端に茫然とした顔に変わった。それじゃ、仕事を続けるように、と現場の責任者が手打ちにしたからには、周囲も軽く笑って何事もなかったように振舞うしかない。

その後は適切な対処であったと証拠立てるように、工場にはふたたび普段通りの機械音だけが響き続けた。実際、何一つ間違っていないか、ただだろう。大人しいはずの人間であるとは誰もが認識していたし、本人も他の工員の見做すところに従っていた節があった。先程のように仕事を投げ打ちたくなる者が出てきたとして、それをなだめる者がいなくてはならない。それが後輩だった。ところが、なだめるはずの人間が実は投げ打ちたくなる衝動を抑えていたとしたら。一人くらい欠けたところで問題はないかもしれない。ただ、それが連鎖していったとしたら。となると、これは責任者が何かの間違いであったと通達を出しつつ、多少の気の迷いを許すしかない。残るは事件を引き起こした当事者が、反省した姿を見せれば良いだけだ。あくまでも、言葉の上では有り余るほどの意欲を見せているのだから。もともと、その顔はしばらくうつむいたままだった。

日が沈まない内に工場を出ると、一人で家路につくらしい後輩の姿が見えた。他の工員にまぎれているが、背筋をしつかりと伸ばして歩いているから、夕明かりに照らされて薄赤い顔がくつきりと現れている。

「飲みにも行くかうか」



振り返ってくれたかと思うと、初めに額がこちらに向けられた。続いて夕日を浴びた目が細められ、険しい臉が一層きつくなる。それから無防備に面と向かったことを悔やむように目をそらしたが、とりあえず提案は受け入れてもらえた。

「最初はあそこまでぶちまけるつもりはなかったんです。というか、不満をぶちまけているという意識さえなかった。なんだか、相手に対して言葉が届いていないように感じられたから、語調を強くしてみようと思ったんだけど、あぁなってしまった」

真一文字に閉められていた口が、店の席に着くと途端に開き出した。歩いている間は声をかけても生返事を返すだけだったが、話しぶりが整っているところを見ると、どうやら頭の中で話の順番を決めていたらしい。

「まあ、杉谷さんはいつもうるさいからぶちまけたくなるのもわからないではないけど」

きっかけを作った工具をダシに冗談めかしてみたが、別に誰が相手だろうと変わらなかったと否定されてしまった。それからも勝手な付度で原因を探ってみたが、いずれも首を縦に振ってくれることはなく、むしろ工場でまくしたてていた言葉について弁解を始め出した。何もお盆や彼岸をやるなどは言っていない、それを押し付けてくれるなど言う事だ……それならば口の挟みようもないから、黙って聞くしかない。ただ、それよりも気になるのは、妙に段取りの良い口ぶりだった。というか、段取りに頼らないと喋れないとでも言うかのように、話と

話の句切れが見つからず、すんなりと論理がつながっていく。口を挟めないのも結局、論理が崩れる時が来たらとの想像に臆して踏まれる二の足に過ぎなかった。

「こんな大それたことは、心に留めておくだけの方がいいんでしょうけどね」

ようやく一息置かれた。が、酒を一滴なめたらふたたび姿勢を伸ばして、前方を見据えてしまう。

「いや、あれこれの仕来たりを誰しも一度は疑ったことがあるよ。ただ、頭をよぎるだけで、それ以上はこだわらないのが普通なんだろうな」

その点、大したもんだよ、と言っても強張った顔が崩れることはない。どうしてここまで依怙地になるのだろうかといぶかしんだ時、いまさら目の前の男の身の上を考えが至った。しかし、すぐさま口に出して詫びようとしたところ、あっさりと首を振られてしまった。

「幸いというべきか、身内の不幸は経験していません。それどころか死体も見たことはない。海の方へボランティアに行ったことがあるだけです。ただ、それが大きかった」

深い呼吸が置かれたが、額の皺はいつそうきつくなっていた。

瓦礫が積まれた様子や、被災した人の心の荒み具合は事前情報として聞いていたから、覚悟はしていたという。知識と現実のズレは確かに大きかった。遺体の整理はついていたというが、ヘドロや潮がもたらした生臭さは消えておらず、聞こえてくるものといえれば重機の音、

見えるものといえは瓦礫の山とその隙間から覗く水平線くらいのものだ。とはいえ、現地にあつて感傷に浸っている暇はない。とにかく瓦礫や泥を片づけなければ来た意味がない。でなければ足手まといだ。ただただ仕事に没頭していたかった。震災の被害を何一つ受けなかったのだから、ツケを払うかのように働くのが当然だと思っていた。そんな風に昼の内は仕事を続け、夕方まで働き通した。その日は快晴という事もあつて人の声や重機の音が良く響き、ともすれば活気に満ちていたから、作業の手が止まることはなかった。視界が広いだけあつて、弱つた足腰を氣遣つているとすぐに見咎められる。場合によっては顔を覗きこまれる。その表情は怒っているにせよ微笑んでいるにせよ、迫ってくるものがある。木材や鉄屑の味気なさにやられかけていたところに人の顔がやってくる、訴えかけてくる者の大きさに応えなければならぬと反発が起きる。たくさんの人々を失つた末に出上がった光景とはいえ、ここからまた築き上げていくだけの気力は十分に感じられて、自分のやっていることは間違いではないとの実感は込み上げてきた。

「けれど、宿泊所に着いた時、それが一気に薄れていったんです。波の音しか聞こえなくなつた。作業の音が聞こえないのももちろん、人が話していても、途切れてしまつたら途端に波の音が埋める。当然宿泊所は高台にあつたわけですが、ずっと遠くの方から同じ音が繰り返されるんです。多くの人を押し流して行つた波の音が。ボランティアの仲間をよく話すようになりました。無音を嫌つたんでしょね。翌

朝眠れなかつたと訴える声も絶たなかつた。あれだけ昼の内は元気に働いていたのに。

そこで何かが断たれていったのを感じましたね。昼と夜がこれだけ違うんだという考えが、生きていることと死んでいることは、相当隔たりがあるんだというところまで拡張されていった。生きている方から死んでいる方へ届かないなら、届かないの振り舞いをしなければならぬ、と考へたのはそれから間もなくでした」

「険しかった目がようやく下されて、机の上に肘が付かれた。顔の前で腕を組み、店の様子を見回している。雰囲気を作るためのBGMが鳴り、客や店員の声が絶えない。

感想を求められているのかとも思つたが、実感を話されては取りつく島もない。なにより、本人の中で結論が出来上がっているのなら、返事の必要はないと感じた。ただ、その声色が相変わらず誰かに問いかけているように聞こえるのは、氣になつて仕方なかつた。ともすると幼ささえ浮かべるように語調が強められ、事実が一気呵成に語られていく。

聞いている分には語られたことにまつわる感想よりも、過去の方へ、妙な言葉を残していった女の方へと、思いが至つていた。機械の音に晒されていると、やっぱり声が幼くなるんだ、と彼女が言つたのは、二人で連れ立った先で偶然にも工場長と鉢合わせた時の話だ。初めはからかうような素振りで近寄つてきたのに、女の受け答えがこなれていたせいでかえつて襟を正されたらしく、それではまたの機会があり

ましたら、ときごちない口調を残して去っていく、その背中を見ながら、ぼつりとつぶやいた。姿が消えるまで見送らなければならぬような気後れを感じていた身としては、自分さえもマヌケだと言われているように思われ聞き咎めざるを得なかったが、悪気はないとこちらの顔を見ることがなく断るので、それ以上は踏み込めない。それから沈黙が挟まり、二人並んで背中が消えていった方を見やっていると、子供の頃、と口が開かれた。

住んでいたマンションの改修工事が行われていたところに、風邪がやってきて寝込む羽目になったことがあるという。両親が共に働いていた上に、朝になって熱が襲ってきたから午前の間は布団にくるまっているしかなかった。玄関を出ていく足音を聞き送り、ふらついた頭に任せてひとまずは眠れたのだが、昼が近付くと男達の笑い声に目を覚まされた。どこかから声が立って、それに応えてまた声が立ち、何人もの声がさざめきだした末に一気に甲高い音へと変わって、床から天井へと抜けていく。

工事の音を誤って捉えていたわけではない。事実、男達の笑い声は十分すぎるほど聞こえてきていた。切削器具の抉るような起動音と、鉄骨が擦れる金切り音が屋上を越えて空へと轟いていたが、それに追いつくようにあちこちから上擦った声が聞こえてくる。

何より、学校でいつも聞いていた男の子達の声に似ていたの、ちょっとだけ低さが残ってるけれど、その低さを邪魔だと思ってるみたいにはしゃぎまわってる男の子の声に、だから良く聴き分けられた、熱

で寝込んでいたけれど気持ちは愉快だったくらい、浮き上がって浮き上がって、どこまでも飛んで行けそうな気分が寝ているだけで味わえるなんて、こんなに気持ち良いことがあるのかと思った。

しかし、昼間になると母親が軽食を携えて帰ってきたので、軽やかな気分はお預けとなった。本當にうるさい、と外に向かつて毒づいている姿をぼんやりと眺めながら食事を済ませ、診察に向かうために外へ出ると、父親よりもずっといかつい姿をした大人が、父親よりもずっと幼い声を出していた。

拍子抜けしちゃった、と笑うものの、その声が高くなっていくことはない。裏切られたなんて言わないけど、こんな大人が自分くらいの子供と何にも変わらないんだ、っていかつい体をした人を見ても怖さはまるでなくなるようになった、さっきの上司さんも実のところそんな風に見てたしね、機械の音の中で働いていると、甲高い音に耳が染まって幼くなってしまうのか、ってという考えがまた当たっちゃった。

目の前に同業者がいるにもかかわらず煽るような言葉が続けられたから、じゃあどんな仕事をやれば大人らしい声になるんだよ、コールセンターの仕事か、と相手の職業を引き合いに出したものの、そんなことは言っていないって、と軽く流されてしまい、後には不用意な言動だったという悔いが残った。

でも、本當に悪気はないの、と微笑まれたかと思うと、弁解が続けられる。風邪が治った後、また一人で部屋に籠っている時に工事に出くわす機会があった。とはいえ、笑い声は聞こえてこない。工具の鋭

い音がひたすら鼓膜を震わせてくるだけだった。増強しているはずなのに、解体されるような恐怖が襲いかかってきて、住んでいる者の耳は破壊されていく。それならば、音の発信源にあつて耳を酷使している人間はその矛盾めいた状況をどう感じているだろう。自分の耳を犠牲にしなから、多くの人々が安らぐための住まいを作り出していく。風邪で寝込んでいる間に味わった、浮き上がっていくような気分を思い合わせてみると、とにかく愛おしくなる、と女は言った。今も思い出すたびその声の幼さに引き寄せられて、自分まで幼くなっていくような、何もかも投げ打ちたくなる感情が湧きあがってくる、と言つて向けられた惚けた表情は、こちらの顔を通り越して背中へと放たれていくようで、置き去りにされている気分がした。

「先輩は、地震がやってきた時どうしていましたか」

ひたすら語り続けていた先輩が、にわかにはっきりとした問いかけをしてくるものだから、少し返答が遅れてしまい、地震ね、と口をついた言葉も相手の声を繰り返すだけになって、思い浮かんでくることもなかったから、どうだっけなあ、という無防備な声が出てしまう。

話すことに困っていると、店のざわめきの底から少しだけ調子の違う音が聞こえてきて、その内しつかりと耳へと入ってきたかと思うと、頭の先まで昇っていき、ようやく雨が降り始めたのだと知れた。したたかに地面を叩きつけていたので、さすがに二人で窓を見ざるを得ず、向かいの店どころか通りすぎていく人の姿さえ隠してしまう豪雨の様子を、口を開けて眺めていた。ただ、それにしても空が青い。街明

かりに照らされているにしても雲が出ているとは思えないほど抜けの良さを感じる青さで、そんな上空と呼び交わすように地上を叩きつける雨は、いつしか人の声をかき消すほどになっていた。

どうと言われても、語れることなどほとんどない。語ってしまったのは眉をひそめられるばかりの実感しか、あの地震からは得られなかった。

三月に入っても寒々しい日が続いた年で、アパートに籠りきつて無為な日々を送っていると、突然地面が揺れ始めた。あの年の冬、君は何をしていた、と問われたことがあるが、怠惰に過ごしていた記憶しか浮かんでこない。それ以前の日常で感じていた起伏を全部吸い取ってしまったのではないかと思えるほどに、長い揺れが襲っていた記憶だけがある。余震が一年近く続いたせいか心はその名残を引きずったまま、突然はしやぎだしかと思うと留まる様子を見せず、落ち着き所が一向に見えてこないという心境がよく訪れた。

しかし、通信の手段がほとんど遮断されていたことで震災の全容が見えなかった数日の間は、むしろ穏やかな時間を送っていたと言える。停電と断水に遭ったものの、食料と貯水の蓄えがあったからインフラの復旧まで待てる目途は付いた。家族とお互いの安否は確かめ合えたし、知人と言つても人との交流は絶つていたから身の周りへ心配りをする必要はない。初日に雪が降ったために寒さには苦しめられたが、翌朝になれば晴れた空が広がったから暖は十分に補えた。

流通が途絶えているらしくあちこちの店は余り物で露店をまか  
つており、並んでいる人だかりも嫌気がさしたという顔を浮かべつ  
つも、そこしか頼るところがないから立ちつくしているほかない。予備  
電源のない信号は警察の管理下に置かれ、店に足止めを食らっている  
のか人通りはなく、携帯もテレビも起動しないからニュースも聞こえ  
てこない、時間が止まっているという感覚がああの数日を覆っていた。

ペランダに出て読みさしていた本をめくっていると、余震のもたら  
す軋んだ音にまじって、ヘリコプターの羽ばたく音が聞こえてくる。  
前方から近づいてくる機体を背中へと通り過ぎていくまで見つめ続  
け、誰も助けになんて来やしない、と諦めの言葉が口をついたが、放  
つておいてくれた方がありがたいような気がした。パトカーや救急車  
のサイレンが聞こえてきても、給水車の在り処を知らせてくれるアナ  
ウンスが聞こえてきても、すべて遠ざかっていく。きっと誰もが同じ  
音を聞いているのだろうか、誰もがこうして座りつくしているのだ  
ろうから、立ち働く必要などない。昼には数える程度の雲が浮かび、  
夜には普段は見えない星が輝きだす、抜けの良い上空の様子に助けら  
れて怠惰は深まっていく。

結局、災害の惨状を知ったことよって暢気な心境はひっくり返さ  
れたわけだが、あの時感じた安易な気分はいまだに忘れ難い。あんな  
日々が続けば良かった、などとはゆめゆめ思いもしないし、何一つ情  
報を仕入れられなかったからこその実感だといっても、度し難いこと  
に変わりはない。

ただ、お盆に帰省している間、雲ひとつない空が広がる中で徒然に  
日々を送っていると、自分の根本はここにあるのではないかという考  
えが頭に浮かんでくる。周囲の時間が止まっているのだから、何をす  
る必要もない。稼業との兼ね合いに心配りをする必要がないから、時  
間が止まっている内は何をするにも自由だ。そんな気ままな気分にな  
れば、周囲から切り離されて自身の輪郭が確かになっていく充実感だ  
けが残る。

あの老爺がやってきたのは、そんな風に恣意に満ちた考えを誰もい  
ない家で巡らしていた時のことだった。呼び鈴がないから声が掛から  
ないと来客が知れないのだが、畳に寝転んでいたおかげか、庭石を擦  
りつける足音がよく聞こえてきた。蟬の鳴きつのる声にまじって、同  
じように一定の調子で歩いてくる人影があると気付くと、玄関で白髪  
が光っている。

祖父に用事があるのだろうか、親戚の墓参りに家族そろって行っ  
てしまったと伝えたのだが、ここまで足を運んでくれたことを無碍に  
するわけにはいかない。冷房を入れるのは断られてしまったが、唯一  
扱えるアイスコーヒーは受け取ってくれた。

体を起き上がらせ台所に立ったところ、テレビからサイレンが鳴り  
渡り、甲子園の試合開始が告げられた。

「あれは空襲警報を思い起こさせるのではないですか」  
グラスを差し出しながらかうっかりと口をすべらせたが、幸  
いにも皺は微笑むためにしか歪まない。表情の移り変わりに目を向け

ていると、肌を深く歪ませているのにどこにも張り戻ってこないの  
で、頭に残っている印象よりも随分老けこんでしまったのだと認識  
が改まった。

「一回だけだからね、私らの頃はあれが何度も何度も繰り返されてい  
た。一度きりの叫びなら余韻しか残らなくて、耳の内では進んで繰り返  
返すことになるのだけど、否応なく反復されるのは堪えますよ。女の  
叫びに似ているでしょう、あれは。一度だけ呼ばれたなら振り向きも  
出来る。しかし、恨み言のごとく叫び続けられてはね」

それに、もう二度と聞く事はない人生と定まったのだから、大分折  
り合いがついてきた、と言いながらグラスを傾けると首が軽く反らさ  
れたが、腕に隠されたために皺が覗く事はない。グラスを置いてテレ  
ビへと向けると、その先には球児が意気込みを述べるVTRが写され  
ていた。

「あれくらいだと騒音がやってきたら、なまじ反発する力はあるもの  
だから、押し負けて挫折してしまいかねないのだけどね。幼いと、押  
し負けたと思うこともなく、ただただ服従するしかないんです」

となれば今はその服従から解放されたようなものだから、イトマを  
与えられた気分には似ていますか、と頭に上ったが、到底口に出せるこ  
とではない。

「君くらいになると、どうだろうな」目が向けられて、咎められてい  
るような気分を覚えた。「いや、直近にそうした出来事がありました  
か……」

語尾が弱められて目が背けられたが、何もかも崩れ流されてしまっ  
た光景を置き去りにして地元へと逃げ帰ってきた身分なのだから、答  
えられることは一つもない。

「しかしね、あの地震は凄かった。この年になると時間の感覚が無く  
なって、何年も前の事が数日前に感じられるようになるけれど、あれ  
は未だに余震が続いているのではないかと思われるほどだ。震災を中  
心に世の中が回っているようなものだから尚更で、真正面からあの揺  
れを食らった人なら、取り残されてしまったような気分を覚えている  
んじゃないかと思ったけれど」

次第に上を向き始めた顎の陰から首が覗いた。しかしそれもわずか  
のことで、瞳を合わされたかと思うと、君は幸いと言うべきか、そん  
な目には遭わなかったようだね、と声が掛けられる。

「僕は二〇を越えて、自分と言うものが粗方出来上がってしまった  
頃です。それを崩すまいと距離を置いてしまったところはある  
かもしれませんが。何か聞かえてくるという感覚よりも、空白だとか  
無音の方が近いかもしれない。話題に出されてもピンとこないところ  
がある」

話している間、親身になってうなずいてくれる姿を見ていると、他  
人事のように話すじゃないか、と自らを振り返る心境が訪れた。

「おそらく、殻に籠ってしまったんだらうね。おかげで自分を守るこ  
とは出来た。代わりに、目の前で起こったことを見つめる力は失って  
しまった」

あるいは周囲から聞こえてくる音を遮断してしまった、と咎めるような言葉をかけられたが、表情は思いの外柔らかい。細められた目が瞬かれるたび慰められているような気分を覚え、事実そうだろうな、と考えが続いた。被災後に訪れた安易な気分もまた、世間の流れが滞っていることで面倒事を免れられるという逃げに他ならない。殻に籠って、自らが生み出した面倒を引き受けるならば一向に構わないが、余所から訪れた雑音にかかずらうのは御免被りたい、他人によって自らの調子を狂わされるのが嫌で仕方ない。あの時は、そして今もお、そんな風に駄々をこねているに過ぎないのだろう。

「結局、耳を塞ぐのもまた、聴覚を壊すことに他ならない。雑音に追い詰められた時点で壊れてしまったのか、それとも籠ってから壊れるのか、それはわからないけれど、耳聴くなってしまうのが避けられない以上、人間は一度耳を壊してしまうよう定められた生き物なのかもしれない。問題は壊れてしまわないようにするよりも、どう立て直すかに懸っているのではようね」

お互いがうなずき合うと、そこで話が一段落ついて声が途切れてしまつて、それ以上話し合うのは無粋とでもいうかのように、各々が自分の視線を定めながら考えを巡らし始めた。蟬の鳴き声とテレビの音をかきわけながら言葉を発したのは、老爺の方だった。

「もっとも、私だつて説教出来るような過去は持つてはいないけれど」  
終戦間際に山腹に戦闘機が墜落した時、顔色が変わっていく大人達を見るのに耐えかねて、遠くに走つていったことがあつた。外を歩

くことだけでも危うい時勢だったのに、何を頼りにしていたのかとにかく遠くへ遠くへ走つていく、その足でたどり着いたのが坂を上った先にある防空壕だつた。土地の者にとつては無用の長物と化していたから、そこなら誰にも見つからないだろうと思つていたのか、それともそこに隠れていれば一切から守られると自衛の意識が残つていたのか、入口を開けて視界の利かない穴倉を覗いていると、ふと声が掛かつて、見覚えのある少女が立つていた。

疎開先の学校で同じ教室に通つていたが、口を利いたことはない。そもそも方言に慣れるまでしばらくは口を利かないで耳から馴染んでいこうとしていたから、友人らしい友人は一人もいなかった。そんな子供が一人で防空壕の前に立つているのはきつと奇妙に思われたのだろう、振り返った先から瞳を捉えられて、一体何を言われるのかと構えざるを得なくなった。何も話しかけては来ない。その内、口を利いた覚えがないのもひとえに、この少女もまた口数が少なく遠巻きに人々を眺めているような子であるためだと思ひ当たつた。男子の作る囲いから一步離れている自分を、余所から見ている瞳があるかと思うと、同じように女子の作る囲いから一步離れている少女がいる。

それから何を話したのか、幼い記憶はおぼろげでつかみようがなくなつてしまつたが、穴倉の中で肌を合わせたことは確かに思い出せる。「あの辺りは温泉もあるおかげで。一步踏み外せば妓楼が立ち並んでいるところだね、もしかしたら巧みに誘われてしまったのかもしれない。おまけに、息がずいぶん堂に入っていたから」

かといって、こちらが拙い息遣いをしていたというわけでもない。穴倉に反響する声に引き寄せられて、深く深く息を通わせ合っていた。お互いの息が合わさっていくにつれ、穴倉に響き渡る音は二重にも三重にも重なっていき、それを手本にしてまた息をつく。自分というものが確かに感じられたし、目の前には実感が錯覚ではないと保証してくれる女がいる。

「安らかだったね。実のところ、警報やら怯えた声やらに耳がやられていたのだと気付けたのもそれがきっかけだったかもしれないし、空襲の時の防空壕で聴いた妊婦の声を思い出したのもそのおかげだったかもしれない。とにかく戦時中の記憶を呼び起こすためには、あの穴倉を経ないといけないんですよ。過去のみなならず、未来へと向かっていくにしても、一度耳の中での息遣いを反響させた後に一步を踏み出していた節さえある」

防空壕を抜けて寄宿舎に帰ると、多少咎められただけでその日は過ぎた。翌日、学校で少女と顔を合わせても、特別お互いに対する態度が変わった覚えはない。ただ相手の様子が目につき始めたから、ざわつく少女達の集まりから一步離れて立ちつくしている姿が、声をかけてもらいたそうに見えるようになった。とはいえ、あの艶めかしい声を思い出すと、どうにも目の前の幼い体つきは別人のように眺められ、話しかけてしまえばあれは錯覚だったと証し立てられそうに思われたから、向こうから声をかけてくれることを願って人だからから一步離れているしかなかった。

「今も願っているんですよ、彼女もまた耳が壊れていたのではないかと。お互いがお互いの息を聞いたことで耳が整ったのではないかと。ひよっとしたら壊れた耳は壊れた耳によってしか癒されないのかもしれない。もう相手の顔すら思い出せもしないけどね。結果的には、何もかも忘れて声だけが聞こえてくることで、私は救われているけれど。」

助平なものです。妻子はおろか孫までいるのにね。今のみならず、あの頃だって、これからまた危機が訪れるかもしれないというのに、暢気に女と交わっていたなんて。けれど、私の時間はあそこで止まってしまっているし、あそこからじゃないと始まらないですよ。一旦自分を確かにする必要があるのですね」

終戦を機に疎開の必要はなくなり、子供たちは生まれた土地へと戻っていくこととなったものの、生家が焼き払われてしまった老爺はそのまま山形に残った。もつとも、形ばかりの移住から土地へと根を下ろす必要が出てきたから、転校が決まり二度と少女には会えなくなつた。

「墓に入る支度をするような話になってしまったね。あの穴倉と棺の中は似ているのかしら。自分の腐臭と暗闇で、少しでも記憶が思いだせるのならいいんだけど」

もつとも、もう時間を前へ前へ押しやる必要はないか、と言って老爺は相好を崩した。返事に困り目を下してしまつたが、気付くとグラスのコーヒーは空になって、甲子園も中盤に差し掛かっていた。



それではお世話になりました、と老爺が立ちあがるのにつられて、見送りのために玄関に向かつて戸を開けると、日が傾きかけているおかげで空が眺められるようになっていた。雲が浮かんでおらず、風が立つこともない。ただ蝉だけが鳴いている。

遅れて敷居がまたがれ、ああ、良い空だ、と黻だらけの首が露わになった。顔が白く照らされ、髪と額の境もなくなっていく。そんな風に空を仰ぐ姿を見ていると、新生児室で横にされ、大人達から見つめられるだけになった従弟の姿が思い返された。ガラス張りの部屋の中にむくれたような顔がいくつも並んでいるので、つまらないからその内の一人だけでも笑わせようと手を振ってみるのだが、応えもしない。こんな細い目をしているのだから身ぶり手ぶりじゃわからない、と叔母が抱えたかと思うと、調子をつけながらおだてるような言葉を掛けて、小さな体を揺らし始めた。すると、口元がわずかにゆるむ。ずっと暗いところに籠っていたのだから視覚が発達しているわけはなく、かわりに声や鼓動はたくさん聞こえていたのだから耳に訴えかければいいのだと教わり、大人の真似をして歌うように声を掛けてみれば、今度は手足をばたつかせ始めた。

何も見えないところから声が聞こえ、どこかで聞いたことがあると耳を傾けてみると、隣の子供が抱えあげられているらしい。親が一方的に言葉をかけるだけで、赤子はといえは応えているのかどうかかわらないやりとりとも言えない声々が聞こえた後、また寝かせられたかと思えば、同じように他の子供が抱えあげられていく。そんな様子

が繰り返される中でようやく自分を抱えてくれる手がやってきて、お前の声を聞かせてくれと言わんばかりのおだてるような声がかける。そうやって声を交わし合う内に、隣の子供達もこうして声を交わし合っていたつけ、初めは感情も何もなかった呻きのような音が、段々と泣いたり笑ったりする声へと変わっていったな、と振り返られて、成長していくということは、こうやって声を交わし合うことなのだ、と無自覚ながら声色として得心を表していく。

老爺と並んで空を仰いでいると、到底、赤子だった頃の心境など思いつくようなものがないが、同じ部屋に並んで同じ天井を見上げている赤子と我々は似ているのかもしれないと思われた。お互いがお互いの声を聞きながら、お互いの真似をしてお互いの親に抱かれ、やがて離れていく。そんな風にお互いがお互いの話をしながら、お互いの耳を整えていくということがあるのかもしれない。

そんな考えを巡らしていると、くれぐれもご自愛ください、という声だけが立って、白い日差しは差し込む庭には足音だけが鳴り渡り、門を出て人の気配がなくなると、後には蝉の声だけがいつまでも聞こえ続けていた。

〈了〉